

追悼抄



次回は3月20日掲載予定です

病床で息を切らし、声を振り絞ったのは、昨年11月のことだった。2日間で計1時間弱、心腹の友への思いを、I-Cレコードに吹き込んだ。

絶筆ならぬ「絶マイク」と名付けた原稿を、空港反対同盟熱田派の元事務局長、石毛博道さん(60)の句集に寄せた。「最初は敵側。それが最後は空氣みたいな存在と思えるくらい親しくなった」と、石毛さんはしおぶ。

愛知県の渥美半島に生まれた。産経新聞の政治部記者時代は、所得倍増計画を掲げた池田勇人内閣の大蔵省を担当。1964年には東京五輪も取材する。どん底からはい上がる日本を追いかけた。転機は36歳。「学究肌」を買われ、交通担当の論説委員に。新国際空港の建設予定地が千葉県富里村(現・富里市)から、近隣の同県成田市三里塚に移った頃だった。

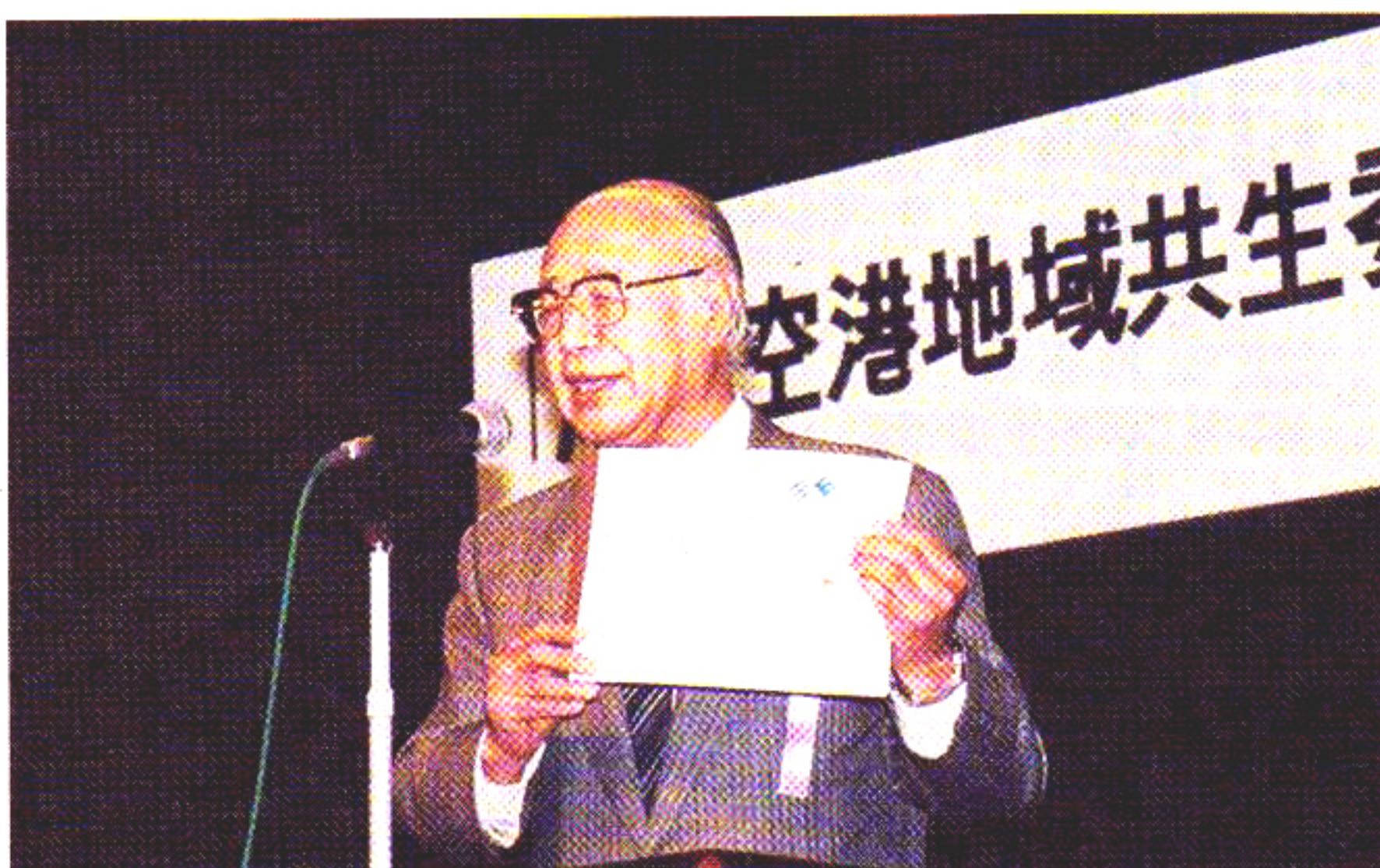
「あつという間に三里塚に変わってしまった。これは

元成田空港地域共生委員会代表委員

山本 雄一郎

(2010年1月1日、肺がんで死去、79歳)

成田に「招かれた」人柄



何だ』という思いから、足を運ぶようになり、成田の観察者になつた」。亡くなる1年前の取材では、成田にかかわるようになつた原点を思い起こすように語った。

闘争が激化し、第2滑走路

を造る工事が行き詰まつてい

た91年、有識者5人からなる

隅谷調査団(团长・隅谷三喜

男東大名誉教授)が仲介に入

つた。その一員として解決の糸口を探つた。同じ調査団に

いた元海上保安庁長官の高橋

寿夫さん(85)は、「メンバー

の中で、成田の土地に一番多く入ったのが山本さん。人柄

からか、入ったというより、招かれていた」と振り返る。

反対派農家と湯飲み茶わん

の酒を傾け、よくしていた話

がある。横からだと四角いが、上から見ると円形の湯飲みを

委員会の代表委員を務めた。

昨年12月、5年後には年間

発着枠が1・5倍の最大30万

回まで拡大できる可能性が報

じられた。地域とともに発展

する「共栄」への一步だ。「や

つと来たよ、ここまで」。病

室で周囲にこう言つて笑みを

浮かべたという。意識がなく

なつたのは、その2日後だつた。30年来的つきあいだつた。

引頭雄一さん(60)は「朗報を

待つて逝つたようで、穏やかな最期でした」。3月15日、

東京プリンスホテルでお別れ

や派閥、境遇が違えば、一つの物事もいろいろな形に見える。物腰柔らかく、「同じ時代に生きる人間同士、腹を割って、分かり合えるところまで話そう」と説いた。

成田空港地域共生委員会設立5周年記念して講演する山本さん(2000年3月、千葉県成田市の成田国際文化会館で)

(東京本社地方部 大谷秀樹)